



# 記述されにくい働き方・ 生き方を記述する

——若者の仕事と生活をめぐるインタビュー、  
エスノグラフィー

尾川 満宏

(愛媛大学准教授)

## I インタビュー、エスノグラフィーの 特技

2000年代初頭、本誌では、丹念なインタビューやフィールドワークにもとづく日本の労働研究の少なさが指摘されていた(佐藤 2002)。労使関係や職場のダイナミクスを描く事例研究が日本で軽視されてきたわけではないが(稲上ほか 2015)、近年では上記の方法による研究が存在感を増してきている。この一翼を担ったのは、不安定化・流動化する若年労働や「学校から職業への移行」の問題に関する調査研究である。そこで本稿では、それらの問題に迫ったインタビューやエスノグラフィーの成果を吟味したい。

エスノグラフィーは、一定期間、現場に密着した観察や聞き取りにもとづく民族誌およびその作成過程として、いまや社会調査の世界では市民権を得ているといえる。したがって、インタビューも含めた質的調査一般の目的や意義の解説は、多数の既刊テキスト(フリック 2011 など)に譲りたい。これらの語は調査の方法を指すものだが、具体的な分析には多種多様な手法や立場があり<sup>1)</sup>、同じ名称の調査方法を用いても大きく異なる知見が得られることは珍しくない。とはいえ、本稿冒頭で確認しておくべきは、これらの方法が、量的調査や統計的な分析では十分に迫ることができな

い、フィールドにかかわる人びとの主観や実存に焦点を当てることである。あるいは、「合理的経済人」には想定されない人びとのアンビバレントな態度や言動、感情の機微に着目し、フィールドのリアリティや人びとの生活世界を読み解く鍵として、それらを積極的に記述=解釈の対象とすることである。

こうした特質をもつインタビューやエスノグラフィーは、質問紙調査が捕捉しづらい人びとや彼らの考え方、ときに逸脱的とみなされる働き方や生き方を記述し、議論の俎上に載せることを得意とする。この特技は、キャリア形成が不安定化・流動化した1990年代以降の若者の経験を検討するうえで、非常に有効であった。日本社会において主流で「標準」的とみなされてきたキャリアとは異なるそれを調査し、個人と社会の、働くことと生きることの間接的な関係を問いただすうえで重要な知見を提供してきたのである。

以下では、いくつかのテーマごとに研究成果を紹介し、こうした方法が何を明らかにしてきたのか、若者の仕事と生活をめぐる研究にどのような展開をもたらしたかについて考えてみよう。加えて、調査方法の特質に関わる問題についてもわずかながら言及し、今後の進展を期すことにしたい。

## II 若者サブカルチャーと不安定な働き方の関係に迫る

2000年以降、非正規の立場にある若者の仕事と生活に迫るエスノグラフィックな調査が蓄積された。東京郊外で「ストリートダンス」に興じる若者たちのフィールドワークを行った新谷(2002)は、彼らの「フリーター」という働き方と、彼らのライフスタイルを特徴づける「地元つながり文化」との関係を描いている。学校・家庭でのさまざまな体験から学校外へと拠点を移す彼らは、フリーターという進路を安易に選択するが、彼らの一貫しない進路観を支えていたのは、職業達成よりも学校の先輩後輩といったつながりを重視する価値観から形成される「地元つながり文化」であった。この文化は仲間たちと時間や場所や金銭を共有することを大切にしており、そのために、彼らは自由の利かない「就職」「サラリーマン」を忌避しフリーターという働き方を選好していた。

新谷(2007)は「地元つながり」について、生活手段の獲得を可能とする「道具的機能」と情緒安定を可能にする「表出的機能」の2側面から読み解いており、それは職業斡旋の機能を欠くが若者たちに目下の「居場所(感)」を提供していたとする。こうした分析から、「無業やフリーターを支援する場合、就職を目的とした道具性中心のものとなりがちであるが、それが当事者の表出性を奪ったり、満たすものとなりえない場合には有効に機能しない可能性」(新谷:250-251)を示唆した。当時の質問紙調査(内閣府2003)によれば、フリーターの大多数はもともと正規雇用を望んでいたのだが、新谷はそうした調査で見落とされた若者像を示したといえる。

「居場所」や「楽しさ」「やりたいこと」への欲求を充足する若者サブカルチャーの実践と労働とを結びつける記述は、以降の研究に散見される。阿部(2006)による「バイク便ライダー」のエスノグラフィックもその一例である。実際にバイク便で働きながら彼が描いたのは、労働(宅配)と趣味(バイク)を統合し、「好き」を仕事にした若者たちが、しかし交通事故や呼吸器疾病を招く危

険労働へと自ら没入していく過程であった。彼らは配達物の「ベストラップ」を更新することで仕事に楽しみを見出し、またサーキットに読み替えた「路上」で運転技術を高めることで、格好悪いユニフォームを格好良いものとみなすようになっていく。身体的な限界を迎えたライダーは職場を去らざるをえず、職場には活躍する現役ライダーしかいないため、危険が直視されることは少ない。バイク便ライダーは「仕事=趣味」によって自己実現を果たしつつ、自分たちが用意したこれらのメカニズムに取り込まれ、危険で不安定な職場で「自己実現系ワーカホリック」に陥っていた。

「スケートボーダー」の職業経験に関する田中(2016)の記述も含め、不安定で危険な働き方と若者サブカルチャーの関係を描く研究は、後者を優先するあまり労働者としての自己意識を欠き、自らを労働市場から周辺化する若者像を提示してきた。この記述の枠組みは、「暴走族」という逸脱文化を「卒業」し労働市場に包摂される若者を描いた佐藤(1984)のそれとは異なっている。特定の社会層が対象ではあるものの、労働と若者サブカルチャーの関係(の描き方)が「断絶」から「調整」や「統合」へ変化したとすれば、それは職業生活と余暇活動をめぐる若者の意味づけの変化を示唆しているのかもしれない。そこには、かつて彼らのような社会層を包摂した「受け皿としての第2部労働市場」の縮小(西田2010)という、社会構造の問題も影響しているだろう<sup>2)</sup>。

## III 社会構造からの影響と若者の主体性をどう論じるか

社会の構造的な変化を強く意識しながら、不安定な「学校から職業への移行」過程を歩む若者を追った研究として、乾彰夫らによる都内高卒者に対する継続的インタビューがある(乾編2006, 2015; 乾ほか2007; 乾2010)。従来、新卒就職を経て企業社会へと包摂されることが日本社会の「標準」的なライフコースとみなされてきた。しかし、その基盤である企業の雇用管理や職業構造が変化するなかで、若者たちは移行期をいかに経験しているのか。この調査で注目されたのも、不

安定な仕事と生活を経験する若者たちのネットワークやコミュニティであった。

たとえば、精神的に追い詰められ離職するなどして、地元でフリーターとして暮らす女性たちの語りは、「生きていこう」「ここが自分の居場所だ」と気持ちを回復させる「地元つながり」の機能を示している（竹石 2006）。しかし他方で、地元の仲間を頼ることで得られる非正規雇用や「キャバクラ」などの仕事と「まっとうに生きたい」という欲求との間で葛藤する若者の姿は、職業紹介に関する資源の乏しさ、つまりネットワーク機能の脆弱性をも露呈させている（乾ほか 2007）。同質の仲間コミュニティに依存し一時的に就労できたとしても、正規／非正規という構造的な分断はそれ以上の展望をひらかせない。このように、不安定な若者たちが語る「つながり」は、「就職斡旋」や「居場所」の機能の有無／強弱という観点から、その意義と限界が論じられてきた<sup>3)</sup>。

「まっとうに生きたい」という欲求は、「労働による自立を果たして一人前」といった近代産業社会が生み出した働き方・生き方の規範（益田 2012）と無関係ではないだろう。こうした規範は、しかし自立を阻むような不安定雇用を必要とする今日の社会構造との間で矛盾を抱え、非正規の立場にある個人に不安や焦りを募らせる。このような状況に置かれたフリーターたちにインタビューを行った益田（2012）によれば、彼らは何らかの「希望」——友人に紹介されて始めた「ネットワーク・ビジネス」（いわゆるマルチ商法）の成功や、中学校の先輩に誘われて始めた「選挙活動」への傾倒など——を見つけることで、自らの生に展望をもとうとしている。しかし、彼らが抱きうる「希望」は必ずしも永続的でなく、崩壊した場合には、不安定な現状を彼ら自身が追認せざるをえない。彼らが経験していることは、現在志向の意識がフリーター選択をうながすとする先行研究の知見とは逆の因果だった。彼らの「希望」は不安を解決するのではなく和らげる「緩衝材」であり、構造と規範の矛盾を個人が引き受ける場合の帰結である。このような洞察をもとに、益田は、フリーターたちの自立と連帯を可能にする新たな社会構想の必要性を提起している。

不安定な若者の経験を困難や崩壊などのレトリックで描く研究が多数を占めるなか、中西・高山編（2009）は、彼らが互いの経験や状況を共有する場に、より積極的な可能性を見出そうとする。中西によれば、それは「各人が手近に可能な仕事に就くかたちでしか（事情とたまたまの機会に任せたかたちでしか）概括されず、したがって、一つの標準的プロセスとして集約されにくい」が、「ノンエリート青年をそれにそって生きるよう誘導し規定する」社会的な「第二標準」の可能性である（中西・高山編 2009：10）。同書に収められた事例でいえば、「自転車メッセンジャー」の若者が築く労働／文化が「バイク便ライダー」よろしくワーカホリック問題に通じるとしても、当人らは避け難い「失敗」を自覚しつつ、しかし不確実で生きにくい世界を「生きるに値する」ものに作り替えようとしている。また、地域ネットワークを築く「請負労働者」らは、職場外の交流で居場所を得つつ、そこに流通する豊富な情報をもとに「よりましな仕事」を求めて「したたか」に生きようとしている。彼らの経験を「漂流」ではなく「航海」として読み解く本書の視座は、不安定な状況を共有する若者が取り結ぶ共同的な関係や、そこに形成される文化——なんとかやっていく、食っていく世界——のなかに、第二標準の規制力やポテンシャルを見出す手がかりを示している。

若者のネットワークやコミュニティは、「標準」的な就労を実現する観点からしばしば消極的に評価される。しかし、構造的に制約された状況を生きる若者の論理や主体性に着目する視点からは、「標準」の文化的な恣意性や階層性を暴きつつ、オルタナティブな働き方・生き方を探究する足場でもある。後者の見方や描き方による重要な示唆は、今日のライフコースの多様性や階層性を無視して若者をめぐる構造と主体の関係を論じたり展望したりすることはできない、ということである。

#### IV ライフコースの多様性を描く

——地域とジェンダーを事例に

社会階層に応じた移行過程の違いに加え、地域に応じたそれも看過されてきた（中西・高山編2009）。大都市フリーター問題が注目された1990年代以降、地方都市や農村の若者が調査対象となることは稀であったが、彼らの置かれた状況が大都市のそれとは異なることが意識されるにつれ、質的調査が行われるようになった<sup>4)</sup>。

地方郡部の田舎町で高卒若年男性にインタビューを行った尾川（2011, 2012, 2018）は、サービス業や非正規雇用の拡大など「東京」的な構造変容と対比しつつ、中小零細建設会社の業績悪化と職人文化の危機を調査地域の重要な変化ととらえている。各種の統計指標が示すように、調査地域の「ノンエリート男性」の労働環境は悪化している。にもかかわらず、その地に暮らす調査協力者らは、身近な年長者や仲間と経験を共有しながら離転職のやり方を学んだり、特定の勤労観・職業観をもつようになっていたり、夫婦共働きを自明視したりして、労働者・生活者としての自己の経験を肯定的に意味づけていた。また、佐藤（2010）は、農作業や手袋工場での女性労働が盛んだった地域で女性へのインタビューを行い、「専業主婦」規範がひろく浸透した時代にさえ、働かない母親は「遊んでいる」とみなされたことを明らかにしている。彼女らは「子どもが小さいうちは母親は子育てに専念すべき」との意識も持ち合わせていたが、女性の賃労働を望ましいとするローカルな仕事観は、彼女らのライフコースを強力に特徴づけたのである。

これらの研究は、若者が地域的な労働史やライフスタイルに関与しながら「地元」の働き方・生き方を学ぶ、その過程を描いている。この過程のリアリティは、「男性稼ぎ主モデル」「専業主婦モデル」のような「標準」的な規範のみで記述されない。地域的な文脈のもとで、彼らがモデルや規範を意味づけなおし、自らの仕事と生活を組織化するそのやり方を解釈する必要がある。無論、量的データから就労や生活の地域的多様性を抽出し、規定要因を推定することはできる。しかし、

聞き取りや観察を通じて得られる質的データは、そうした多様性を地域的な構造や条件に安易に還元せず、構造や条件をめぐる解釈実践によって構築される、各地の若者たちに生きられた社会のあり様として浮かび上がらせる。それはつまり、それぞれの経験を一定の働き方・生き方として成立させる歴史的・経済的・文化的なコンテキストであり、大都市の調査だけでは見えてこない日本社会の一側面なのである。

地方の若者と同様、「ノンエリート女性」という女性層の労働実態も長らく看過されてきた。近年になって、乾らの調査からスピノフした杉田（2015）や、沖縄の風俗業界で働く女性の生活史を描いた上間（2017）などが成果をまとめている。主に貧困を背景として進学を諦めたり、家事を一手に引き受けたり、家出をしたり、正社員より趣味を優先したり、性的労働を転々とするなど、彼女たちの生は波乱に満ちている。その経験をつぶさに聞き取るなかで明らかになったことは、しかし「彼女たちの行動原理を経済的な困窮度だけでとらえるのは一面的だということである。彼女たちの選択は、一時点だけでとらえると非合理に見えても、長期的な履歴に即して解釈すれば、彼女たちなりの生活をつくりだすために必要」なものだった（杉田2015:222）。

上に列挙したトピックの性質上、これらの調査は共感を交えた非常に丁寧な聞き取りとして、ときに深刻な相談として進められた。杉田や上間は、女性たちの経験を丁寧に記述することを重視し、実践的示唆の提示に拘泥しない。その理由について、傍目には心もとなく感じられるものの、その都度取捨選択を行い、見通しを得ようとする彼女らの生の主体性を、第三者的な「分析」や「支援」のまなざしが矮小化してしまうからだと、筆者は考えている。このことに留意しつつ、ノンエリート女性の経験をどう描き、いかなる働き方・生き方の展望に、いかなる社会の展望に接続させていくか。その試みの余地と意義は大きい。

## V 結びにかえて

### ——フィールドアクセスと研究成果

以上、若者の仕事と生活に関するインタビューやエスノグラフィーの研究成果を、筆者なりの視点で整理・吟味してきた。最後に、こうした成果が見込まれる質的調査の方法上の留意点について言及しておこう。

研究課題に応じた適切なフィールド選びは、大切である。だが、実際に調査に先立ってそれを判断することはかなり難しい。むしろ、これらの調査はアクセスしたフィールドから問いを立ち上げる点に意義と特徴があり、調査の進展に応じて関心を発展的に修正することは、質的調査で「できること」以上に「すべきこと」である<sup>5)</sup>。

その際、フィールドにおける調査者の立場は重要な問題である。フィールドへの参入方法は多様で、労働現場に自ら身を置き（阿部 2006）、また道端の若者に声をかけてストリートでもともに過ごすなかで（新谷 2002）、同僚や仲間として話を聞くこともある。学校を通じて、調査チームとして生徒や卒業生とつながる方法や（乾 2006）、風俗店オーナーに話を通して取材を始めるケースもある（上間 2017）。これらの先行研究や、質的調査のテキストに書かれた方法は、フィールドに参入しようとする際の手本になりうる。しかし、参入後の調査者と調査協力者との関係性は偶発的に変化するものであり、その距離感や対話の内容、観察場面を計画どおりに再現することは不可能である。ややこしいのは、各調査に固有の関係性が、フィールドで出くわす語りや場면을規定し、結果として記述や解釈、研究成果をも方向づけることである。

こうした特質を自覚し、調査過程も含めて成果を検証可能にするためには、フィールドアクセスの方法や調査協力者との関係性によって研究課題が焦点化された経緯を読み手にひらくことや、調査者が調査に持ち込むイメージや言説などを解釈上の資源として積極的に位置づけ、記述する方法が有効だろう（白松 2009）。この方法が若年労働研究の分野で洗練・共有されているとはいえ、筆者自身も試行錯誤の段階にある。本稿では紙幅

が尽きてしまったが、こうした方法を探究しながらリフレクシブな態度で調査と記述＝解釈を行い、その特技を存分に生かすとき、われわれは「記述されてこなかった」働き方・生き方のリアリティに出会うことができるだろう。この出会いのなかにオルタナティブな社会を展望するための手がかりを見出すことが、インタビューやエスノグラフィーの醍醐味なのである。

付記：本研究はJSPS科研費16K17423の助成を受けた。

- 1) インタビューの方法を例にとると、構造化されたインタビューや半構造化、非構造化インタビュー、あるいは個別的なインタビューや集団で行うフォーカス・グループ・インタビューなど、目的やフィールドの特性などに応じてさまざまなやり方がある。
- 2) 西田（2010：46）は、「大企業あるいは中規模の安定した労働条件とは大きく違っていたとはいえ、家族形成を可能にする程度の雇用の安定と賃金を提供していた労働市場、たとえば『町工場』や小規模な販売店やサービス業、そして建設関係の労働などを、低学歴でさまざまな事情がある者も参入可能であった『受け皿としての第2部労働市場』と呼ぶ」。
- 3) これらの研究が新しい若者支援の指針を示した点は重要な貢献である。しかし同時に、若者たちの労働経験と「つながり」とを個別に実体化し機能主義的にむすびつけることで、「つながり」をめぐる若者たちの解釈実践を見逃した側面もある（尾川 2012, 2018）。
- 4) 以下で紹介するもののほか、轡田（2017）や石井ほか（2017）がまとめた成果を報告している。
- 5) フィールドに長くいても当初の視点や枠組みに疑問が生じない場合、調査者の思い込みや、調査者が調査に先立って用意した仮説や概念をフィールドに投影しようとしていることを疑う必要があるかもしれない。質的調査では「感受概念」という問題関心の考え方が参考になる（フリック 2011などを参照）。

#### 参考文献

- 阿部真大（2006）『搾取される若者たち』集英社。  
 新谷周平（2002）「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』71, pp. 151-170。  
 ——（2007）「ストリートダンスと地元つながり」本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店, pp. 221-252。  
 石井まことほか編（2017）『地方に生きる若者たち』旬報社。  
 稲上毅・石田光男・八幡成美・池田心豪（2015）「労働調査で大切なこと」『日本労働研究雑誌』No. 665, pp. 4-21。  
 乾彰夫（2010）『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち』青木書店。  
 ——編（2006）『18歳の今を生きぬく』青木書店。  
 ——編（2015）『高卒5年 どう生き これからどう生きるのか』大月書店。  
 ——ほか（2007）「明日を模索する若者たち」『教育社会学研究』22, pp. 19-119。  
 上間陽子（2017）『裸足で逃げる』太田出版。  
 尾川満宏（2011）「地方の若者による労働世界の再構築」『教育社会学研究』88, pp. 251-271。  
 ——（2012）『「地元」労働市場における若者たちの『大人への移行』』『広島大学大学院教育学研究科紀要』61, pp. 57-66。

—— (2018)「若者の移行経験にみるローカリティ」『教育社会学研究』102, pp. 57-77.  
轡田竜蔵 (2017)『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房。  
佐藤郁哉 (1984)『暴走族のエスノグラフィー』新曜社。  
—— (2002)「労働現場の民族誌」『日本労働研究雑誌』No. 500, pp. 56-70.  
佐藤友光子 (2010)「地域のなかの親と子」岩上真珠編著『〈若者と親〉の社会学』青弓社, pp. 138-167.  
白松賢 (2009)「閉ざされたフィールドを拓く」『教育社会学研究』84, pp. 49-64.  
杉田真衣 (2015)『高卒女性の12年』大月書店。  
竹石聖子 (2006)「『地元』で生きる若者たち」乾編『18歳の今を生き抜く』青木書店, pp. 227-254。  
田中研之輔 (2016)『都市に刻む軌跡』新曜社。  
内閣府 (2003)『平成15年版 国民生活白書』。  
中西新太郎・高山智樹編 (2009)『ノンエリート青年の社会空

間』大月書店。  
西田芳正 (2010)「貧困・生活不安定層における子どもから大人への移行過程とその変容」『犯罪社会学研究』35, pp. 38-53。  
益田仁 (2012)「若年非正規雇用労働者と希望」『社会学評論』63 (1), pp. 87-105。  
フリック, U., 小田博志ほか訳 (2011)『新版 質的研究入門』春秋社。

おがわ・みつひろ 愛媛大学教育学部准教授。最近の主な論文に「若者の移行経験にみるローカリティ——仕事、家族、地元のリアリティをめぐる社会＝空間的アプローチの可能性」『教育社会学研究』第102集 (2018年)。教育社会学専攻。